光信公ゆかりの地紀行８

青森県黒石市　～もう一つの城下町～

光信公
津軽藩始祖
入部530年

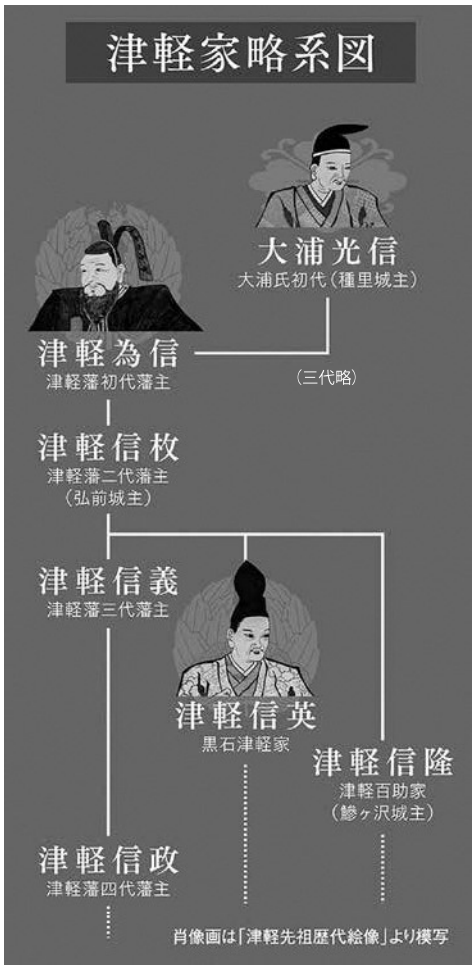
『小説上杉鷹山』で知られる作家の童門冬二は、旅行記『人生の歩き方はすべて旅から学んだ』のなかで、鰺ヶ沢町や弘前市の歴史を訪ね歩き、戦国の世を生き抜いた大浦光信と、後継者である津軽為信の先見力の高さを称賛しています。秋田県横手市、岩手県久慈市、そして鰺ヶ沢町へと流転してきた光信公とその一族の物語は、津軽藩の誕生によって、弘前の地でクライマックスを迎えたのでした。

さて今回は、そこからさらに歴史の流れをたどって、津軽藩のもう一つの城下町である青森県黒石市を訪れてみることにしましょう。

■津軽信英と黒石津軽家

津軽信英は３代藩主信義の弟で、津軽為信の孫にあたります。明暦元年（１６５５）に兄の信義が急死し、跡を継いだ４代藩主信政がまだ幼かったことから、徳川幕府は叔父の信英に後見人（藩主の補佐役）を命じました。この時、信英は津軽藩領のうち黒石など５０００石の領主として分家しました。以後、津軽家は弘前の本家と、津軽信英を初代とする黒石の分家に分かれることになります。

黒石津軽家は、信英の後も代々弘前本家を支え続け、文化６年（１８０９）からは１万石の大名（黒石藩）になりました。



■黒石陣屋と城下町

信英は、領主屋敷として黒石陣屋を構え、黒石の町づくりを進めました。現在の黒石市御幸公園から黒石神社にかけての一帯が、黒石陣屋の跡地です。御幸公園には、信英による黒石開町３２０年を記念して建立された「黒石城趾碑」（黒石津軽家14代承捷揮毫）が歴史を今に伝えています。

「こみせ通り」で有名な黒石市中町も、津軽信英によって形成された町です。北は青森、南は弘前につながる交通の要所として栄えました。中町の通りには造酒屋、醤油屋、米屋などの商家が建ち並び、一部の商家については現在も営業が行われています。

■黒石神社

寛文２年（１６６２）、信英は43歳で死去し、遺言によって黒石陣屋の一角に埋葬されました。その翌年、信英の一周忌に合わせて御廟所が造営され、弘前津軽家をはじめ多くの人々が参拝に訪れました。明治12年（１８７９）には、地元の有志らによって、御廟所の場所に黒石神社が建立され今日に至っています。現在は、黒石津軽家15代承公氏が宮司を務めています。

黒石市発展の基礎を作った津軽信英公の魂は、今もこの地に眠り、鰺ヶ沢町の光信公と同じように、永く地元の人々に慕われ続けているのです。

（町学芸員　中田）

黒石神社（黒石市市ノ町）

中町こみせ通り（国重要伝統的建造物群保存地区）

黒石陣屋跡（黒石市御幸公園）